

蟹江町歴史民俗資料館 おうちミュージアム

第3回 蟹江町出身の探偵小説家・小酒井不木について知ろう！



～小酒井不木はどんな人？～

小酒井不木(こさかい ふぼく)は蟹江町出身の探偵小説家(ミステリー作家)であり、医学者です。

～少年時代～

小酒井不木は、今から130年前の明治23年(1890年)10月8日に、新蟹江小学校の近くの家に生まれました。本名は小酒井光次(みつじ)といます。

子どものときの不木は、スポーツよりもお寺で大人に交じってお話を聞いたり、自分で考えた物語を大人に語ったりすることを楽しんでいました。

～医学者をめざして～

勉強が好きで頭もよかった不木は、医者をめざして東京帝国大学(現東京大学)とその大学院に進みます。大正4年(1915年)に結婚して、その2年後にはアメリカやヨーロッパへ留学しました。しかし、イギリスで病気が悪くなり、入院してしまいます。

～文学の道へ～

日本に帰国した不木は、奥さんの実家である神守村(現津島市)で体を休めながら、文章を書く仕事を始めます。新聞で連載をしたり、外国の探偵小説などを日本語で紹介しました。その一方で、医学の勉強も続けました。

～探偵小説家、小酒井不木～

少しずつ病気がよくなると、不木は名古屋市内に家を建て、本格的に小説を書くようになりました。ミステリー小説や医学の知識を活かした話など、たくさんの作品を生み出すだけでなく、小説家仲間たちと交流して日本の探偵小説の世界を盛りあげました。

様々な活躍をしてきた不木ですが、病気のために昭和4年(1929年)4月1日に38歳で亡くなります。しかし、不木が書いたさまざまな作品は、『小酒井不木全集』として、17冊の本にまとめられ、今に残されています。